

犬山祭

犬山祭は犬山城下町の氏神針綱神社の例祭であり、4月7日試楽・8日本楽である。観光客と祭関係者の都合に合わせ4月の第1土・日曜に実施する。

私は犬山祭の中に生まれ、育まれた。3歳で太鼓を敲き、高校生で祭囃子の笛を習った。ジャズミュージシャン山下洋輔さんが、祭囃子はジャズだと言っているのを聞いたことがあるが、まさに私の体の中には即興の旋律、犬山祭のお囃子が刻み込まれている。

長じて、県議会議員になり、犬山祭は愛知県指定文化財なので犬山祭保存会の会長になった。犬山市長の時、国の重要文化財に指定され、現在ユネスコの無形文化遺産候補になっている。私の体内に流れていた祭の血は、政治家という職業を経て、郷土愛と結びついた。私はふるさとの祭から多くのことを教えられ、考え、学んだ。

犬山祭は1635年に始まり、今年で381回目を迎える。1600年、関ヶ原の戦いで戦乱の世は終り徳川幕府が成立、尾張徳川藩の家老であった犬山城主が町衆に氏神を尊重すべしと言ったのが犬山祭の始まりという説がある。城と町と祭の歴史は軌を一にする。最初は神輿を中心にわずかな練り物を出す程度であったと思われるが、犬山城下の町衆の力で江戸中期には13台の車山(ヤマ)を曳き回す現在の原型が出来上がった。

犬山祭は典型的な都市型の祭であり、祭関係者以外に見せる祭だ。柳田国男によると、日本の祭は古代農山村の神事中心の祭から、中世都市の見せる祭になった時期から祭礼に変化したと言う。曳山は巨大な総合美術工芸の文化財であり、動く博物館である。

犬山祭の特徴はからくり人形だと断言できる。実は40体近いからくり人形戯の多くは渡来系の物語なのだ。世界中の神がアニミズム漂う多神教のわが国に集り、百花繚乱の如く舞う。思想家沢新一氏は能楽者金春禅竹の「明宿集」を引き合いに出し、日本の神は芸能と職人の世界に宿るという。まさにからくり人形師玉屋庄兵衛の職人氣質やからくり人形戯に「宿神」を観る。

また、「からくり」は「機械」という字を書いた如く今日でいう所のロボットであろう。幕府の政策により、一切の発明発見を禁じられた科学者たちは祭のからくり製作に精魂を傾けたのかもしれない。その後からくり人形戯は関西では人形浄瑠璃に、関東では歌舞伎になり、中部圏はからくりの遺伝子がトヨタの織機や自動車などのモノ作りに繋がったと言う仮説を立てている。

犬山祭は一見江戸文化のようではあるが、深く観察すると、歴史の断層を貫き、やはり縄文の魂に行き着く。針綱神社の東北1キロ地点に3世紀に作られた東ノ宮古墳がある。ここに埋葬されている人物が針綱神社のご祭神であることは間違いない。神話と古代史を繋ぐ空想が祭への情熱を掻き立てる。

